令和３年度　第２回全校研究会資料

全校研究主題
「児童生徒一人一人が主体的に取り組む授業づくり・生活づくり」
～各教科等を合わせた指導の充実を目指して～

１　主題設定の理由

◎なぜ「主体的」に取り組む姿を目指すのか（メインテーマの理由）

学習指導要領が改訂され、新学習指導要領の実施が小学部より順次開始されている。

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をとおして、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、児童又は生徒に生きる力を育むことを目指す」とされ、急速な時代変化に対応するための「主体的・対話的・深い学びの実現」が重要視されている。

本校の学校教育目標は、「一人一人が光り輝き、心豊かにたくましく生きる人間を育てる」であり、自立と社会参加に向け、主体的に活動し心豊かにたくましく生きる人を育てることを目指している。

これまでの３年間の校内研究でも同様のテーマを掲げて授業改善に取り組んできたが、職員を対象としたアンケートでも児童生徒の目指す姿や授業作りでの課題点として「主体的な学び」を挙げている職員が多く、引き続き取り組むこととした。児童生徒が主体的に活動し、達成感や充実感を感じる経験を積み重ねることにより、将来の自立、豊かな充実した生活へとつながることを期待したい。

◎「主体的」な姿を狙うために、なぜ各教科等を合わせた指導の充実を目指すのか（サブテーマの理由）

新学習指導要領では、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、①実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力など」③学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性など」の三つの柱からなる「資質・能力」をバランスよく育んでいくことを目指している。そして、その「資質・能力」を育むために、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」という視点からの授業改善を重要視している。

知的障害がある児童生徒に対する教育を行う本校においては、実態に即して、教科別の指導を行うほか、必要に応じて各教科等を合わせて指導を行うなど、効果的な指導方法を工夫しながら指導計画を立て、授業を行っている。社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう、三つの力①②③をバランスよく育んでいくために、各教科等を合わせた指導（以下、合わせた指導とする）の授業改善は、児童生徒がどのように学ぶか（「主体的・対話的で深い学び」が実現できているか）を見つめ直すきっかけとなり、資質・能力を育むための一つの有効な手段となるのではないかと仮定し、サブテーマを設定した。

新学習指導要領では、合わせた指導の解説に「各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科等の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要となる」との一文が加えられた。本研究でも、合わせた指導において各教科等との関連を改めて意識しながら授業づくり・生活づくりに取り組み、指導内容の一層の充実を図っていきたい。また、寄宿舎の研究においても、中学部・高等部の対象生徒について各学部と指導計画・単元目標等を情報共有し、授業で学んだことを生活の中で生かせるよう、連携を図りながら研究を進めていきたい。

２　研究の目的

合わせた指導において、各教科等の視点を踏まえた目標を設定し指導・支援に取り組むことを通して、児童生徒一人一人がより主体的に活動でき、生きる力を育むことのできる授業づくり・生活づくりを目指す。

３　研究期間

２年（R3～4）

４　研究の内容

（１）　児童生徒の主体性が発揮される授業づくり・生活づくりを目指して、新学習指導要領にある各教科等の「目標・内容の一覧」をもとに合わせた指導の目標をたて、内容を検討する。

（２）　実践を通して、昨年度までの研究成果も踏まえてＰＤＣＡサイクルによる授業改善・支援の充実を図る。

５　研究の方法

＜１年次＞

（１）生活単元学習や作業学習などの合わせた指導の中から、年間で取り組むものを学部ごとに決める。（５～６月）

（２）関連する教科の視点を踏まえた単元ごとの指導計画、個別目標等を設定し、授業実践に取り組む。（６～７月頃から開始）

（３）昨年度研究において作成・使用した授業改善シート等を活用しながら評価・授業改善を行い、必要に応じてシートの改善等を図りながら、より実践を継続しやすいものにしていく。

（４）寄宿舎においては、寄宿舎での生活指導そのものを「合わせた指導」であると捉え、指導・支援のさらなる充実を目指して研究に取り組むこととする。具体的には、学校で設定した寄宿舎生の個別の指導計画を踏まえて、学校・寄宿舎それぞれにおいての課題、取り組みたい内容等について担当者間で情報交換し、共通して取り組むべき目標を確認して指導・支援実践に取り組む。

（５）単元ごと、学期ごと、年度末に児童生徒の成長を振り返り、次年度の指導計画に生かせるようにする。

＜２年次＞

（１）　１年次研究の反省をもとに指導計画をたて、継続して授業実践を行う。

（２）　ＰＤＣＡサイクルを円滑に、効率的にまわすための工夫を行う。

（３）　研究のまとめ（HP による研究公開）

６　推進計画

	１年次	２年次
４月	第１回全校研究会 全体の研究計画提案	第１回全校研究会 ２年次の推進計画の提案及び学部研究について
５月	学部研究会	学部ごとに推進、実践
６月	学部ごとに推進、実践	
７月		（高教研講演会）
８月	（高教研講演会）	
９月		
10 月		開かれた授業研究会
11 月	開かれた授業研究会	研究のまとめ（２年次）
12 月	（９～１１月）	研究のまとめ（２年間）
１月	１年次のまとめと次年度の方向性	次年度の研究について
２月	第２回全校研究会（１年次のまとめ）	第２回全校研究会（研究のまとめ、次年度の研究提案）
３月		

7　各学部、寄宿舎の実践

（１）小学部

ア　研究計画

月	内容
４月	第１回全校研究会
５月	１年次の方針確認、略案・授業改善シート等の様式検討
６月	取り上げる単元を選定（学団・学年）、内容等検討
７月	個別目標・手立ての検討、授業実践
８月	
９月	
10 月	
11 月	研究授業・授業研究会
12 月	１年次のまとめと次年度の方向性
１月	R4 生単の単元見直し・必要に応じて年間指導計画様式見直し
２月	第２回全校研究会
３月	

イ　実践内容

（ア）　昨年度までの校内研究

他学部に先行して新学習指導要領が実施されることに伴い、合わせた指導について各教科等の視点で計画段階から検討していくために、平成 30 年度～令和２年度は『「やってみよう」「おもしろい」「できた」を目指して～「合わせた指導」について教科の観点から～』をテーマに、合わせた指導と各教科等の関連について、その捉え方や授業改善シートへの反映のさせ方などを検討しながら授業実践を行った。

（イ）今年度の実践内容

改めて合わせた指導と各教科等の関連に焦点を当てて研究を進めるにあたり、今年度は『育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立て、授業実践することで、合わせた指導の中で各教科等の目標も達成できること、そして、それは子どもたちが将来の生活に生かし、自立につなげる力として達成されること』を目指し、生活単元学習で授業実践を行った。

まずは三観点（知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性など）をバランスよく育んでいけるよう、「どのように学ぶか」の視点を重視し取り組むこととした。また、合わせた指導と各教科等とのつながりをさらに深めていくために、略案様式等を見直し、関連する各教科等の要素を授業者間で確認しながら授業実践に取り組んだ。

具体的には、

・単元のねらい一つ一つについて、どの教科等を合わせた内容であるか記載(昨年度からの継続した取り組み)。

・単元ごとの個別目標について、従来の様式を見直した「個別目標シート」を作成（表１）。目標と、それを達成するための手立てについて、単元のねらいにリンクした形式で、各教科等の関連を意識しながら簡潔に記載し、できるだけ負担なく個別目標を設定できるよう試みた。また、それらを事前に授業者間で共有して授業を行った。

・研究日を活用して単元の評価を行い、次の単元や次年度へつなげられるようにした。

なお、小学部では、単元のねらいについて三つの観点に分けて設定しているが、低学団においては、年度途中より単元のねらいを１～２つに設定し、既存の「単元のねらい」「個別目標」を「単元（個別）の評価の観点」として「児童のどのような姿が見られればねらいを達成できたことになるか」について具体的に三観点に分けて示し、その達成を目指して授業に取り組んだ。

表１：個別目標シート（高学団バージョン）

・「単元のねらい」より選択。
・全て選択でも OK（その場合、補足不要であれば「全」「ア～カ」などの記入 or 無記入でも OK）
・評価基準として補足等必要がある場合は簡潔に記載。
（「記入例」より）

R3　生活単元学習「高学団仲良しタイム」　個別目標	
備考　生活内容･･･ア基本的生活習慣　イ安全　ウ日課・予定　エ遊び　オ人との関わり　カ役割　キ手伝い・仕事 ク金銭の扱い　ケきまり　コ社会の仕組みと公共施設　サ生命・自然　シものの仕組みと働き 道徳内容･･･A 自分自身　B 人との関わり　C 集団や社会との関わり　D 生命や自然、崇高なものとの関わり 自立活動区分･･･１健康の保持　２心理的な安定　３人間関係の形成　４環境の把握　５身体の動き　６コミュニケーション ※各項目詳細は学習指導要領等を参照	
単元のねらい	〔知識・技能〕 ア　学団の友達や教師の顔や名前などが分かる。(国)(自４) イ　ゲームのルールが分かり、教師の支援を受けてゲームに参加することができる。(国)(生オ)(自２３) 〔思考・判断・表現〕 ウ　友達や教師の顔写真や名前カードをマッチングすることができる。(国)(算)(自４) エ　ゲームの中で、自分の好きな物や使いたい道具を選ぶことができる。(国)(自４５６) 〔主体的に学習に取り組む態度〕 オ　友達や教師の様子に注目したり、進んで関わろうとしたりする。(生オ)(道 BC)(自２３４６) カ　活動に関心をもち、進んで参加しようとする。(生エオ)(自２３４６)(道 A)
個別目標	手立て　（　）内に関連教科等を記入
イ) エ)２択 オ)支援を受け意欲的に	イ)同じ内容に数時間繰り返し取り組む（自２） 具体物やカードを提示するなど工夫＆手本を見せる（自２） できていたら「いいね」「できたね」（自３） エ)好きなものを選択肢に加え、具体物で選ぶ（自６） オ)指さし、拍手、声掛け等で注目を促し楽しい雰囲気で（生オ）
M	

ウ　成果と課題

（ア）　成果

・指導案（略案）と個別目標シートを活用し、単元ごとの『育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てる』ことを意識しながら計画を立てることができた。個別学習シートに記載される個々への支援の手立ては、普段から他の授業において行っている支援であることも多いが、授業実施前に改めて一人一人の行動や想定される課題を思い浮かべ、「こういう時にはこうしていこう」とシミュレーションすることで、単元のねらいや指導内容がより一人一人の実態に応じた形で共有され、効果的な支援を行うことにもつながった。

・生活単元学習を「合科指導」ではなく、「実際の生活上の目標や課題に沿って計画し、取り組むもの」であることを確認しながらねらいを設定したことにより、「合わせた指導」としての単元のねらいを見失うことなく取り組むことができた。

・各教科等の目標を達成していく視点に立ち、授業に臨むことができたため、例えば授業中の声掛けについて、普段、児童が国語や算数、図工など各教科で学習している言葉や概念に触れ、一緒に具体物を見たり触ったりして、ものの名前、色、形、触り心地などを実感するという経験を積みながら学習に取り組むことにもつながった。

（イ）　課題

・生活単元学習を通して児童の関心が高まった取り組みについて、生活（調理）、図工（学習内容を振り返り絵画や立体作品を作る）など一部の教科とは事後に関連付けて指導を行えていた部分があったが、例えば個別学習が主となる国語や算数の時間などで、事後に再度取り上げ、関心をより高めたり、教科の新たな目標に設定して取り組み始めるきっかけにしたりすることにはなかなかつながらなかった。

・体育、音楽、低学団「遊びの指導」についても授業改善シートを回覧してエピソード記録や授業の改善点等を記入しているが、細切れの単元が続く時や、行事の都合等で教師の業務が増える多忙な時期は、シートに日々記入しそれを活用して評価することが難しかった。

・低学団と高学団で「ねらい」「評価の観点」についての捉えを一本化するに至らず、各様式を学部で統一することができなかった。

エ　次年度に向けて

生活単元学習の年間の単元、ねらい、指導内容を、単元間・学団間・各教科等などとのつながりの視点から見直す。また、各教科等も含めた授業改善シート等の様式や使い方（回覧回数など）を見直し、無理なく効果的に活用できる方法を探るとともに、学部での統一した様式を作る。

（２）中学部

ア　研究計画

月	内　　容
４月	第１回全校研究会
５月	中学部研究の方針、内容確認 作業学習における教科「職業・家庭」の目標と支援の共有
６月	作業学習における教科「国語」「数学」の目標と支援の共有
７月	開かれた授業研究会・授業研究会
９月	生活単元学習（宿泊学習・修学旅行の単元）における教科「社会」「理科」の目標と支援の共有
11 月	作業学習における教科「職業・家庭」の目標と支援の共有
12 月	作業学習における教科「国語」「数学」の目標と支援の共有
１月	１年次のまとめ
２月	第２回全校研究会
３月	次年度の研究方法・内容の検討

イ　実践の方法・内容

全校研究主題を受けて、中学部では研究実践の主な場を作業学習とし、その充実を目指した。

毎月の研究日に表１のように、合わせた指導における各教科の主な目標と支援を共有した。「ア　研究計画」にあるように、作業学習を中心に取り上げ（９月のみ生活単元学習）、１つまたは２つの教科について検討した。目標については、できるだけ一つの内容を三つの観点（知識及び技能、思考・判断・表現力、学びに向かう力・人間性等）で書き分けるようにし、その達成を目指すために、「主体的、対話的で深い学び」として支援の手立てを記載した。

開かれた授業研究会は、工芸班の作業学習（単元名「力を合わせてミニレターセットを作ろう」）で行った。指導案には、作業学習の目標に加えて、主に研究日に検討した国語、数学の各生徒の目標も記載し、教科の視点からも授業づくり、授業改善を行った。また、指導・支援について、主体的、対話的で深い学びの視点から整理して記載した。同日に行われた授業研究会では、参観者から生徒の力が発揮されていた場面を付箋に記入してもらい、それを三観点に沿って整理するグループワークを行った。

表１　作業学習における数学の目標の例

生徒名 （記入者）	何ができるようになるのか　数学は「数量の基礎」「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」の中から１つ		
	生きて働く 知識及び技能	未知の状況も対応できる 思考力、判断力、表現力等	学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力、人間性等
生徒１ （職員１） 前期目標	２つの数量を比較することができる。	数量の大きさを表す用語に注目して表現することができる。	数を数えたり比較したりすることに関心をもち、数を意識して作業することができる。
	どのように学ぶか主体的、対話的で深い学び（三つの力をバランスよく育てるための手立て）		
	・数を意識できるようにできた部品を置いたり入れたりする所に数字をふる。また、目標数を意識できるように印などをつける。 ・多い少ないなどを表すジェスチャーを添えて、成果を確認する。		
前期評価	教師からの評価をもとに、目標数と実際の作業量を比較することができた。	教師が示す手本に応じて「たくさん」「少し」などの数量の大きさを表す用語に注目してジェスチャーで表現することができる。	目標数を意識して作業することができた。
後期目標	３段階程度の数量（多い、普通、少ない）を比較することができる。	数量に関する質問に対して自分で数量をジェスチャーで表現することができる。	・数量と評価の違いに気づいて、意欲的に作業をすることができる。

ウ　成果と課題

（ア）成果

・各教科の視点を踏まえた合わせた指導の授業づくり、授業改善

これまでの作業学習の授業づくりや授業改善では、生徒が主体的に効率よく作業できるようにすることに目がいきがちであったが、教科の目標を明文化することで各教科等の指導の機会であることを改めて意識して授業を行うことができた。例えば、木工班では、木材の切断作業のための印付けの際に、必要な数値がすべて書かれている紙を提示したり、メジャーの目盛に色を付けたりする支援をしていたが、数学の倍数や測定についての目標をかかげたことで、倍数を電卓や暗算で求めながら印を付けるなど、数学に関する知識及び技能を身に付けたり活かしたりする場面となった。日誌の様式、手順表で使う言葉、報告の仕方、作業量の確認や評価の仕方など、様々な授業改善を国語や数学などの生徒の実態を踏まえて行うことができた。

・三観点での目標設定や評価

知識及び技能に加えて、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力、人間性という観点からの目標の達成にも迫ることができた。先に挙げた木材の切断の場面を例にすると、作る製品によって切断する長さを判断したり、よりよい製品を作るために正確に測定しようとしたりするなどである。これは、合わせた指導で実際的な経験を大切にしている良さであると思われる。また、評価においては、生徒の個人内差に気付くこともできた。例えば、知識及び技能は身に付いているが、その力を自分から積極的に活用したり、その力を使う良さや喜びを感じたりという点（学びに向かう力、人間性）についてはさらなる支援が必要だと思われる生徒もいた。

（イ）課題

・三観点での目標設定の難しさ

三観点で目標を書き分ける難しさがあった。学習指導要領に挙げられている各教科の「目標・内容の一覧」を参考にしつつ、三観点の中心的な意味を押さえ、生徒の実態に応じて柔軟に三観点で指導目標や評価を記載していく必要がある。

・今回取り上げなかった合わせた指導や教科も

今年度、主に取り上げたのは合わせた指導は作業学習、教科は「職業・家庭」「国語」「数学」であった。それ以外の合わせた指導や教科についても今年度取り組んだような授業づくりや授業改善を行っていく必要がある。

・教科別の指導との関連

より効果的に目標を達成できるよう、教科別の指導の目標との関連をさらに意識して合わせた指導の授業づくり、授業改善をしていく必要がある。

エ　次年度に向けて

今年度の成果につながった取り組みは維持しつつ、課題点の改善につながるような取り組みをしていきたい。

（３）高等部

ア　研究計画

４月	第１回全校研究会
５月	高等部研究の内容検討、高等部テーマについてアンケート実施
６月	高等部研究テーマ、研究内容、対象生徒決定
７月	担任と作業担当との情報交換 （夏季休業中） 「授業改善シート」の活用、授業実践 「教科・領域関連表」の作成
８月	「木工班」の取り組みについて情報共有、支援方法の検討
９月	開かれた授業研究会（高等部：作業学習木工班）
１０月	「調理班」の取り組みについて情報共有、支援方法の検討
１１月	「陶芸班」の取り組みについて情報共有、支援方法の検討
１２月	「手芸班」の取り組みについて情報共有、支援方法の検討 今年度の研究反省（アンケート実施）
１月	「農環班」の取り組みについて情報共有、支援方法の検討 今年度の研究まとめ
２月	第２回全校研究会

イ　実践内容

＜研究テーマ＞　自ら考え、身に付けた力を発揮できる授業づくり
～各教科とのつながりや視点を取り入れた作業学習～

高等部では、合わせた指導である「作業学習」に焦点をあて、生徒一人一人が主体的に取り組む授業の構築に向けた研究をすることにした。まず始めに、作業学習で望まれる生徒の主体的な姿について検討した。そこで多く挙げられたワードの１つが、自分で考える・判断する・気付くなど「思考力・判断力・表現力」に関するもの、もう１つが、学んだことを生かす、意欲をもって最後まで取り組むなど「学びに向かう力、人間性」に関するものであった。以上のことより、「自ら考え、身に付けた力を発揮できる授業づくり」を高等部の研究テーマに設定した。

また、新学習指導要領の実施に伴い、今まで効果的な指導方法として取り組んできた合わせた指導について、改めて各教科との関連を見直す必要があると考えた。作業学習で取り組んでいる内容にはどのような教科の要素が含まれているか、また生徒が今までに各教科等でどのような力を身に付け、それを作業学習の中でどのように生かすかなどを検討し、各教科等とのつながりや視点を取り入れて指導の充実を図ることにした。

以上より、今年度は次の２つの研究を行った。

■研究１

＜内容＞生徒の各教科の達成状況を確認し、それを作業学習の内容や目標につなげる。

＜取り組んだこと＞①　作業班ごとに、対象の生徒１名について担任と情報交換する（各教科で身に付いたこと、課題などを確認）

②　情報交換に基づいて作業学習の目標を設定（後期～）

③　授業改善シートを活用し、作業内容や支援方法を見直し実践（ＰＤＣＡ）

④　学部研で、対象生徒の様子を学部全体で共有し、支援の方法について検討。

・授業改善シートの様式は、昨年度の研究で活用したシートに、担任との情報交換で得た情報（各教科等の達成状況や課題）を入力する欄を新たに加えた。＜図１＞
・今年度は、作業班ごとに研究対象生徒を１名にした。
・授業改善シートの入力回数は、作業班ごとに決めることにした。

高 等 部 授 業 改 善 シ ー ト （調理班）

生徒名	3年　B組　I ・ M
個別の目標	・積極的に仕事に取り組み、いろんなレシピを覚えることができる。→（後期）次にやることを考えながら、積極的に仕事をすることができる。 ・販売時に、大きな声でお客さんに対応することができる。→（後期）自分から挨拶や会話をすることができる。

各教科の実態（できること、取り組んでいること、課題など）		※担任からの情報	
国語	・補聴器を使用したことで耳の聞こえが良くなった。語彙が増えてきた。 ・漢検5級。感想などを構成するのは難しい。	数学	・簡単な足し算ができる。　・電卓を使える。 ・金種は分かっていると思われる。
産社	・あすなろホームを目指す。（販売や喫茶の仕事などがある。）	自立活動	・集団の中で自分の意見を話すことが目標。
道徳	・自分から挨拶は課題。 ・作業教室への出入りでは挨拶できる。自信があることは言える。	その他	・行動に移すまでや、理解するのに時間がかかる。 ・寄宿舎で、後輩に話しかけるようになった。

担任との情報交換で得た情報

日付（期間）	作業内容	支援の仕方（どのように学ぶか、支援の手立て）	※	評　価　（作業の様子） ※◎支援の仕方がよかった　△支援の仕方が悪かった　◇支援の方法の改善案
8月26日	お総菜販売	・販売2日前に「職員室に入室・退室するときの挨拶」「注文を受けた先生に商品を届けるときに挨拶」について書く用紙を渡し、考えてくるように伝える。 ・販売前日に、考えてきた挨拶を元に、話す内容を教師と一緒に確認し、練習する。	◎ ◎ △	・前日に考えた挨拶を、自発的に小さいメモ帳にまとめてきていた。 ・職員室に入室するときは、メモを見ずに挨拶することができた。昨晩 と。時々、思い出そうとして無音になる時間があるが、練習してきたセ ことができた。 ・商品を届けた副校長とのやりとりで、イレギュラーなこと（「おつりありま に、何も反応できずシーンとした時間が続くことがあった。分からな 待ちください。」と話してシーンとなる時間を減らすことを次の
8月31日	ケーキ販売（寄宿舎）	・お惣菜の時と同様に、事前に職員室への入室・退室の挨拶を練習。入室の挨拶には、今日のおススメを加えることにした。 ・今回は、購入に来てくださった方に「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」をしっかり伝えることを目標にすることを確認。	△◇ △◇	・Rと2人で寄宿舎への販売を担当。 ・寄宿舎に着いたときに、メモ帳を忘れてきたことに気付く。入室の挨拶では です。ケーキの販売に来ました。」までは話せたが、その後は言葉がつまってしまったので、教師が後ろでささやき、その言葉を話した。→持ち物の確認不足。 ・販売の途中、籠に入っているスプーンを取って欲しいと伝えたが反応なし。意味が分からないのかともう1度伝えたが動けず。その後泣き出す。訳を聞くと、教師の勢いにびっくりしたとのこと。その後は自分から挨拶できる状態でなかったため、教師と一緒に声を出すようにして販売活動を

生徒の様子・変容、支援方法について評価を積み重ねる。

＜図１　調理班の授業改善シート＞

■研究２

＜内容＞作業内容がどの教科・領域等と関連しているかを明確にする。
＜取り組んだこと＞①　学習指導要領「各教科の目標・内容の一覧」を見て、作業学習の内容と関連があるところを探す。
②　①で調べたことを基に、作業班ごとに「教科・領域関連表」を作成。

・「教科・領域関連表」の様式は、Ｒ３高教研講演会で佐々木全先生から紹介のあった「単元構想シート」を基に作成した。＜図２＞
・シート上で、各教科の内容をクリックすると番号で表示されるが、番号だけだと内容が分かりづらいため、教科の領域名称及び育成すべき資質・能力の三つの柱を入力する欄を設けた。

学習指導要領の各教科等の内容を選択すると番号で表示される。

・各教科等の領域名称や内容
・育成すべき資質・能力の三つの柱
　知識及び技能→【知技】
　思考力・判断力・表現力→【思判表】
　学びに向かう力、人間性→【学】

つまみ細工

・準備、片付け
・製作（布選び、花型の器具を使って縫う）
・報告

作業内容

国語	140	142		150	172	言葉の使い方、敬語【知技】聞く話す【思判表】
社会	51					生活との関連、選択・判断する力【思判表】
数学	272	324				数の処理、図形の位置関係【思判表】
理科						
音楽						
美術	52					構成の創意工夫（表現）【思判表】
保体						
職業	45	47	55	57		勤労の意義、作業の確実性・持続性・巧緻性【知技】
家庭	83	85				布を用いた製作（縫い方、用具の取扱い）【知技】
外国						
情報						
道徳	62	65	68	74	76	自主、自律、礼儀、勤労、集団生活
特活	60	61	66			集団活動【知技】【思判表】
自活	9	10	12	17	22	人間関係形成、環境の把握、身体の動き

刺し子

・材料、道具の準備と片付け
・一定時間集中
・丁寧な作業
・報告・相談

国語	140	142	146	166	171	言葉の使い方、敬語【知技】聞く話す【思判表】
社会	61					きまり【思判表】
数学						
理科						
音楽						
美術	46	54				表現の創意工夫【思判表】
保体						
職業	39	43	45	47	57	勤労の意義、職業生活【知技】【学】
家庭	83	85				布を用いた製作【知技】【思判表】
外国						
情報						
道徳	62	64	65	74		自主、自立、勤労
特活	61	62	64	65	67	
自活	6	9	10	25	27	心理的な安定、人間関係の形成

＜図２　手芸班の教科・領域関連表の一部＞

【開かれた授業研究会】作業学習「木工班」

「適材適所の品質向上計画」という単元名で、１１月の光陵祭販売活動に向けた木工製品作りに取り組んだ。作業内容については、教科別の学習で身に付けた力を把握した上で、生徒が力を発揮できる活動、今頑張っていることにつながる活動、最も得意とし見通しがもてる活動などを取り入れることを意識した。

研究会では、生徒の主体的な姿、配慮や支援、教科とのつながりについてグループごとに協議した。支援のバランスについて、作業内容や分業についてのアイデアなど、様々な意見が出された。

【その他の作業（「自ら考え、身に付けた力を発揮する」ための取り組み。）】

「調理班」・・・対象生徒：高３女子

担任との情報交換では、補聴器の使用で聞こえが良くなり、語彙が増えてきた［国語］、自分から挨拶やコミュニケーションをすることが苦手［自立］、実習では、福祉事業所で販売や喫茶の仕事をしている［産社］など現在の実態を把握した。そこで、自分から挨拶や会話ができることを目標にし、販売活動の回数を増やし、人と接する機会を多く設定することにした。学部研での支援方法の検討で挙げられた、事前にシミュレーションすることが有効という意見を参考に、練習→実施→反省を繰り返し、その都度次回の目標を考えた。また、話す内容を自分で考える時間も設けた。その結果、どんな場面でどう話したらよいかというバリエーションが増え、自分で言葉を選びながら自信をもって話すことが増えてきた。

「陶芸班」・・・対象生徒：高２男子

福祉的就労を希望している生徒である。担任との情報交換で、必要な報告をすること［国語］、与えられた仕事に責任をもって取り組むこと［産社］、などについての課題が出たため、「指示された作業後、自分から報告することができる」という目標を設定した。朝礼の際に毎日挨拶練習をすることで、作業の際に必要な挨拶を覚えることができた。また、作業の区切りごとに報告を行うことを習慣づけ、その際に言葉遣いについて繰り返し指導を行った結果、適切な言葉遣いとタイミングで報告ができるようになった。

またこの生徒は、粘土の計量をする際に電子秤の値を見て重さの判断をすることが難しい。その支援方法について学部研全体で検討した結果、学級の数学の時間にも「重さ」について取り組む必要性を把握できた。

「手芸班」・・・対象生徒：高１男子

福祉的就労を希望している生徒である。刺し子やミシンを使った製品づくりに取り組んだ。作業に慣れてくると自分なりのやり方に変えてしまい、失敗してしまうことがあった。そこで、手もとに手順表を置いて見えるようにしたことで、教師が注意しなくても自分で気を付けながら決められたとおりに作業を進めることができるようになった。また、朝礼での挨拶練習の声が周囲の声にかき消されてしまうような小さな声だったことから、挨拶係の仕事を割り当て、全体の前に出て手本になるように大きな声で挨拶ができるようになった。自分の仕事であることを意識し責任をもって取り組めるようになってきた。

「農環班」・・・対象生徒：高１男子

一般就労を希望している生徒である。作業開始当初は、忘れ物が目立ったが、チェックシートの活用により自分で確認することができるようになり改善された。

作業での目標を「指示を理解して、見通しを持ち、意欲的に作業をする。」に設定して取り組んできた。口頭指示への理解はできたが、具体的な（見通しのある）行動への支援が足りず、失敗に繋がってしまうことが何度かあった。作業の特質上、同じ内容を繰り返し行うことが難しかったことやマニュアル化しにくかったため、指示内容の確認、取り組みの評価を教師が行った。作業中の評価をもとに行動を考えながら修正できるようになり、自信をもって取り組めるようになってきた。

エ　成果と課題

（ア）成果

＜研究１について＞

・担任と作業担当との情報交換は、各教科等における生徒の実態を把握する機会となり、それに基づいて作業学習の目標を設定することができた。

・授業改善シートを活用することで、生徒の達成度や課題を把握することができ、作業内容や支援方法について職員間で話し合いながら改善を図ることができた。

・学部研の時間に対象生徒について全体で話し合ったことは、複数の視点で様々な角度から生徒を見ることができ、新たな支援方法を見出すことにつながった。また作業学習の様子を受け、各教科へフィードバックする部分があることに気付くことができた。

＜研究２について＞

・「教科・領域関連表」を作成することで、作業学習と各教科等とのつながりを確認できた。

・教科別の指導に含まれていない理科や社会などの教科も、作業学習の一部に含まれていることを知ることができた。

・「教科・領域関連表」を作成するためには、学習指導要領の各教科等の内容すべてに目を通す必要があるため、この研究が学習指導要領を読むきっかけとなったという職員が多かった。

（イ）課題

＜研究１について＞

・担任と作業担当との情報交換を、いつどのように設定するかは検討が必要である。

・授業改善シートの様式は、次年度へ引き継ぎのためのまとめの欄が欲しいという意見もあり、活用しやすいように改善を図る必要がある。

・対象とする生徒の数を次年度は増やした方がよいという意見と、負担感を考えると次年度も対象は１人の方が良いという意見があるため、検討が必要である。

＜研究２について＞

・「教科・領域関連表」を作業班内で分担して作成したが、教科の捉え方に個人差が出る。

・作業内容や方法は毎年同じではないため、年度毎に関連表を見直す必要がある。

オ　次年度に向けて

今年度の取り組みの中で有効だった担任との情報交換、学部全体での支援方法の協議などは来年度も継続しつつ、そのやり方や授業改善シートの活用方法、対象生徒の人数などを検討して、生徒が主体的に取り組む授業づくり、及び各教科等とつながりのある指導のより一層の充実を図っていきたい。

来年度より高等部も新学習指導要領が全面実施となる。各教科ごとの評価も求められてくるのだが、職員に実施したアンケートによると、すべての教科を評価できるか不安に感じている職員も多い。今回作成した「教科・領域関連表」を手掛かりにしながら、来年度は各教科等の評価の仕方についても探っていきたい。

（４）寄宿舎

ア　研究計画

	校　内　研　究
４月	研究会（９・金）　第１回全校研究会（20・火）
５月	研究会（14・金）
６月	研究会（11・金）
７月	研究会（16・金）
８月	研究会（27・金）
10 月	研究会（８・金）
11 月	研究会（19・金）
12 月	研究会（17・金）
１月	研究会（28・金）
２月	研究会（10・金）　第２回全校研究会（14・月）
３月	研究会（11・金）

イ　実践内容

（ア）寄宿舎のテーマ

「生徒一人一人のやる気・主体性の成長を目指して」
～ 学校との連携を通した支援 ～

今年度の全校研究のテーマを受け、寄宿舎における生徒の主体性を伸ばすための　取り組みの一つとして、寄宿舎で取り組める内容を、学校と寄宿舎（以下、学舎とする）双方で確認し、生徒が主体的に取り組むための支援方法の改善や充実を図っていきたいと考えた。また、今回の取り組みを学舎の連携を深める良い機会と捉え、双方の取り組みや生徒の様子について情報を共有することにより、生徒一人一人が気付き、自ら行動できる主体性の成長を目指し、PDCA サイクルによる支援の改善に向けて取り組むこととした。

（イ）方　法

・ 職員１名につき担当の生徒１名を対象とする。
・ 学級担任、または副担任等、学部の職員と連携をとり、寄宿舎で取り組める支援を確認する。
・ 学舎双方の取り組みや生徒の様子について情報を共有し、支援の改善につなげ、主体性の伸張を図る。

（ウ）内　容

連携を深めるための一つの手段として、研究係が中心となり、対象生徒をピックアップし、学級担任等と情報交換を行いながら、目標や手立ての確認を行った。目標については、学舎で共有して取り組めることを挙げることで、生徒の実態を多面的にとらえ、様々な場面で活用できる力を身に付けることをねらいとした。

ウ　成果と課題

学舎で話し合いの場を持ち、生徒個々の目標について学部と共有することができた。しかし、学部との話し合いの場を設定するまでに時間を費やし、やる気・主体性を引き出す、PDCA サイクルを

活用した取り組みまでには至らなかった。

エ　次年度に向けて

　学部と話し合う場面設定を検討し、学舎双方の取り組みや生徒の様子について情報を共有し、生徒の自主的な行動につながるよう、PDCA サイクルを活用した環境づくりや支援方法の実践に取り組んでいきたい。